

2014 年 7 月 28 日

横浜市 市長 林 文子 殿  
横浜市教育委員会 教育長 岡田 優子 殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
支部長 長谷見 雄二

KN日本大通りビル（旧三井物産横浜ビル）および旧三井物産横浜支店倉庫の  
保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、今般、横浜市中区日本大通り所在のKN日本大通りビル（旧三井物産横浜ビル。以下、事務所ビル）及び旧三井物産横浜支店倉庫（以下、倉庫）について、新たな活用計画があり、とりわけ倉庫に関しては、取り壊しを検討されている旨、伺っております。

両建物は、本会によるわが国の近代建築の調査研究をまとめた『日本近代建築総覧』（1980 [昭和 55] 年刊行）において、特に価値の高い近代建築として掲載されている他、貴市都市デザイン室企画『都市の記憶 横浜の近代建築 I』（1991 年）にも詳細に取り上げられるなど、価値ある建物として広く周知されていること、ご高承のことと存じます。

1910（明治 43）年 7 月の倉庫竣工に続き、1911（明治 44）年 8 月の事務所ビル竣工、1927（昭和 2）年の事務所ビル増築を経て今日に至る両建物は、日本の鉄筋コンクリート造の先駆者、遠藤於菟により設計されました。倉庫には、屋根・柱を鉄筋コンクリート造、壁を煉瓦造、床を木造とするユニークな混構造が用いられており、事務所ビルにおいて全面的に採用された鉄筋コンクリート造を、倉庫にて試験的に導入した遠藤の創意が見て取れます。すなわち、この事務所ビルが日本最初の全鉄筋コンクリート造のオフィスビルであることを鑑みれば、両建物は、日本における鉄筋コンクリート造の成立過程を示すきわめて貴重な建物群として位置づけられます。また倉庫は、新港埠頭煉瓦倉庫（通称赤レンガ倉庫）より古く、横浜に現存する最古の倉庫建築としても、高い歴史的価値を有します。

さらに、両建物は日本屈指の生糸貿易商社の横浜における拠点建物であり、事務所ビルのみならず倉庫ともに、明治期の創建のまま現存するきわめて希有な例として、日本の近代史上高い価値を有するだけでなく、横浜開港の歴史を象徴する日本大通りの都市景観を構成する貴重な建築としても、広く市民に親しまれてきたことは言うまでもありません。

貴下におかれましては、この建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ、永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建物の保存活用に関して、学術的観点からの相談をお受けいたします。

敬具

2014 年 7 月 28 日

KN 日本大通りビル（旧三井物産横浜ビル）及び旧三井物産横浜支店倉庫  
についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
歴史意匠専門研究委員会  
主査 藤田 康仁

1) 建物の概要

横浜市中区日本大通 14 番地に所在する KN 日本大通りビル(旧三井物産横浜ビル。以下、事務所ビル)は、明治 44 年(1911 年)8 月、三井物産株式会社横浜支店の事務所棟として竣工した。起工は前年の明治 43 年(1910 年)8 月である。一方、当ビルに隣接して、明治 42 年(1909 年)に起工した旧三井物産横浜支店倉庫(以下、倉庫)が同 43 年(1910 年)7 月に竣工している。事務所ビルは昭和 2 年(1927 年)に、創建時と同じスタイルで増築され、ほぼ二倍の規模となって、今日に至っている。つまり日本大通りから見て左側部分が明治創建時のもので、中央部および右側部分が昭和増築時のものということになる。なお、倉庫を 1 号倉庫と呼ぶことがあるのは、かつてこの倉庫の背後に 2 号倉庫があったためである。

設計及び監督は、明治創建当初も昭和の増築時も日本の鉄筋コンクリート造の先駆者として知られる遠藤於菟(1866-1943)による。ただし、創建時には鉄筋コンクリート構造のスペシャリストとして酒井祐之助(1874-1935)が加わり、二人の共同設計となっている。施工は、創建時の両建物の概要を掲載した『建築雑誌』(305 号、明治 45 年 5 月)が「分業請負」としているから、いわゆる直営といえる。なお、昭和の増築時の施工は不詳である。

建物の現状の規模は、事務所ビルが 4 階建て地下 1 階で建築面積約 733 m<sup>2</sup>、延床面積約 3898 m<sup>2</sup>、倉庫が 3 階建て地下 1 階、建築面積約 549 m<sup>2</sup>、延床面積 2194 m<sup>2</sup>であり、外壁仕上げについては、事務所ビルが化粧煉瓦タイル張りで腰部は花崗岩張り、庇および窓廻りは人造石洗出し仕上げ、倉庫は道路側ファサードが化粧煉瓦タイル張りで、その他は煉瓦壁の露出、庇および開口部周りは人造石洗出し仕上げとなっている。

両建物は、基本的には創建以来、三井物産横浜支店の事務所ビルおよび倉庫として知られてきたが、昭和 34 年(1959 年)から、倉庫は日東倉庫株式会社の使用するところとなり、日東倉庫日本大通倉庫としても記憶されている。平成 25 年(2013 年)には、両建物とも株式会社ケン・コーポレーションの所有するところとなり、今日に至っている。ちなみに、関東大震災の被害状況としては、事務所ビルは火災を被るなど若干の損壊があった模様である一方、倉庫はまったくの無傷であったとされている。

2) 歴史的価値

先述の『建築雑誌』(305 号、明治 45 年 5 月)は、事務所ビルを「全部鉄筋コンクリート造り・・・地形、柱、壁、天井兼床、階段及屋根に至る迄総て内部に軟鋼鉄の鉄筋を縦横に入れ之を包む上等のセメントコンクリートを以てなしたるものにして之に使用したるセメント約二千樽鋼鉄約百噸也」と記している他、『横浜貿易新報』紙(明治 44 年 9 月 14 日)も「全部鉄筋コンクリート造りとなし」と報じている通り、この建物は最初の全鉄筋

コンクリート造のオフィスビルとしてあまりにも名高い。倉庫については、同誌が「壁は煉瓦造にして屋根及柱は鉄筋コンクリート造りとし床は木製にして」と記しているように、煉瓦と鉄筋コンクリートに木造を加えた、いわゆる混構造である。当時はまだ新しい技術であった鉄筋コンクリートの性能を試験的に倉庫で使用することで確かめた上で、事務所ビルにおいて全面的に鉄筋コンクリートを展開したとされることを踏まえると、この倉庫は鉄筋コンクリート造建築のプロトタイプのひとつとして捉えることもできる。一方、見方を変えれば、この煉瓦・鉄筋コンクリート・木からなる、倉庫におけるユニークな混構造は、結果として一種の柔構造として機能し、それが故に関東大震災にも無傷で耐えたとも考えられる。なお、明治創建時の事務所ビルは柱梁構造であるが、昭和増築部ではフラットスラブが採用されており、これも日本のフラットスラブの最初期の試みと言える。

事務所ビルは、最初の全鉄筋コンクリート造という構造面からの重要性のみならず、意匠的にも注目される。すなわち、突出したコーニスとその持ち送りを除いて、当時、通常用いられていた様式建築の細部を備えておらず、驚くほどモダンでシンプルであり、日本の近代オフィスビルの先駆的な作品でもある。それはまた、セセッション（ゼツェッション）の最初期の現われとも見なされるが、アール・ヌーヴォーのパイオニアとしても知られる遠藤於菟の会心の意匠作品とも捉えられる。加うるにこの建物は、創建当初からエレベーターを備え、屋上には水洗便所に用いるコンクリート製の水槽が設けられており、設備面においても先駆的な作品であった。もちろん、この建物は日本大通りの旧居留地に進出した日本の商社の建物の先駆けをなす貿易の最前線基地であり、この倉庫に置かれた生糸の量が一時期の日本の国家経済を左右するほどだったと言われる通り、日本近代史における重要性はいうまでもない。

以上のように、当事務所ビル及び倉庫は、日本最初の全鉄筋コンクリート造の建物であり、最初期の鉄筋コンクリート造建物の現存最古の遺構である。世界的に見ても、最初期の全鉄筋コンクリート造として貴重な遺構の一つであろう。日本の鉄筋コンクリート造のパイオニア、遠藤於菟が、倉庫において煉瓦造、木造と組み合わせた混構造として鉄筋コンクリートによる建築を試み、事務所ビルにおける全鉄筋コンクリート造の全面的な導入を経て、昭和増築時においてフラットスラブの使用へと至ったという、日本の鉄筋コンクリート造成立の歴史的展開が包含されているという点において、現存するかけがえのない技術史的サンプルであり、両建物のもつ建築史的、近代史的価値は極めて高い。

2014 年 7 月 29 日

ケン・コーポレーション株式会社  
代表取締役社長 佐藤 繁 殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
支部長 長谷見 雄二

KN日本大通りビル（旧三井物産横浜ビル）および旧三井物産横浜支店倉庫の  
保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、今般、横浜市中区日本大通り所在のKN日本大通りビル（旧三井物産横浜ビル。以下、事務所ビル）及び旧三井物産横浜支店倉庫（以下、倉庫）について、新たな活用計画があり、とりわけ倉庫に関しては、取り壊しを検討されている旨、伺っております。

両建物は、本会によるわが国の近代建築の調査研究をまとめた『日本近代建築総覧』（1980 [昭和 55] 年刊行）において、特に価値の高い近代建築として掲載されている他、貴市都市デザイン室企画『都市の記憶 横浜の近代建築 I』（1991 年）にも詳細に取り上げられるなど、価値ある建物として広く周知されていること、ご高承のことと存じます。

1910（明治 43）年 7 月の倉庫竣工に続き、1911（明治 44）年 8 月の事務所ビル竣工、1927（昭和 2）年の事務所ビル増築を経て今日に至る両建物は、日本の鉄筋コンクリート造の先駆者、遠藤於菟により設計されました。倉庫には、屋根・柱を鉄筋コンクリート造、壁を煉瓦造、床を木造とするユニークな混構造が用いられており、事務所ビルにおいて全面的に採用された鉄筋コンクリート造を、倉庫にて試験的に導入した遠藤の創意が看取れます。すなわち、この事務所ビルが日本最初の全鉄筋コンクリート造のオフィスビルであることを鑑みれば、両建物は、日本における鉄筋コンクリート造の成立過程を示すきわめて貴重な建物群として位置づけられます。また倉庫は、新港埠頭煉瓦倉庫（通称赤レンガ倉庫）より古く、横浜に現存する最古の倉庫建築としても、高い歴史的価値を有します。

さらに、両建物は日本屈指の生糸貿易商社の横浜における拠点建物であり、事務所ビルのみならず倉庫ともに、明治期の創建のまま現存するきわめて希有な例として、日本の近代史上高い価値を有するだけでなく、横浜開港の歴史を象徴する日本大通りの都市景観を構成する貴重な建築としても、広く市民に親しまれてきたことは言うまでもありません。

貴下におかれましては、この建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ、永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建物の保存活用に関して、学術的観点からの相談をお受けいたします。

敬具

2014 年 7 月 29 日

KN日本大通りビル（旧三井物産横浜ビル）及び旧三井物産横浜支店倉庫  
についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
歴史意匠専門研究委員会  
主査 藤田 康仁

1) 建物の概要

横浜市中区日本大通 14 番地に所在するKN日本大通りビル(旧三井物産横浜ビル。以下、事務所ビル)は、明治 44 年(1911 年)8 月、三井物産株式会社横浜支店の事務所棟として竣工した。起工は前年の明治 43 年(1910 年)8 月である。一方、当ビルに隣接して、明治 42 年(1909 年)に起工した旧三井物産横浜支店倉庫(以下、倉庫)が同 43 年(1910 年)7 月に竣工している。事務所ビルは昭和 2 年(1927 年)に、創建時と同じスタイルで増築され、ほぼ二倍の規模となって、今日に至っている。つまり日本大通りから見て左側部分が明治創建時のもので、中央部および右側部分が昭和増築時のものということになる。なお、倉庫を 1 号倉庫と呼ぶことがあるのは、かつてこの倉庫の背後に 2 号倉庫があったためである。

設計及び監督は、明治創建当初も昭和の増築時も日本の鉄筋コンクリート造の先駆者として知られる遠藤於菟(1866-1943)による。ただし、創建時には鉄筋コンクリート構造のスペシャリストとして酒井祐之助(1874-1935)が加わり、二人の共同設計となっている。施工は、創建時の両建物の概要を掲載した『建築雑誌』(305 号、明治 45 年 5 月)が「分業請負」としているから、いわゆる直営といえる。なお、昭和の増築時の施工は不詳である。

建物の現状の規模は、事務所ビルが 4 階建て地下 1 階で建築面積約 733 m<sup>2</sup>、延床面積約 3898 m<sup>2</sup>、倉庫が 3 階建て地下 1 階、建築面積約 549 m<sup>2</sup>、延床面積 2194 m<sup>2</sup>であり、外壁仕上げについては、事務所ビルが化粧煉瓦タイル張りで腰部は花崗岩張り、庇および窓廻りは人造石洗出し仕上げ、倉庫は道路側ファサードが化粧煉瓦タイル張りで、その他は煉瓦壁の露出、庇および開口部周りは人造石洗出し仕上げとなっている。

両建物は、基本的には創建以来、三井物産横浜支店の事務所ビルおよび倉庫として知られてきたが、昭和 34 年(1959 年)から、倉庫は日東倉庫株式会社の使用するところとなり、日東倉庫日本大通倉庫としても記憶されている。平成 25 年(2013 年)には、両建物とも株式会社ケン・コーポレーションの所有するところとなり、今日に至っている。ちなみに、関東大震災の被害状況としては、事務所ビルは火災を被るなど若干の損壊があった模様である一方、倉庫はまったくの無傷であったとされている。

2) 歴史的価値

先述の『建築雑誌』(305 号、明治 45 年 5 月)は、事務所ビルを「全部鉄筋コンクリート造り・・・地形、柱、壁、天井兼床、階段及屋根に至る迄総て内部に軟鋼鉄の鉄筋を縦横に入れ之を包む上等のセメントコンクリートを以てなしたるものにして之に使用したるセメント約二千樽鋼鉄約百噸也」と記している他、『横浜貿易新報』紙(明治 44 年 9 月 14 日)も「全部鉄筋コンクリート造りとなし」と報じている通り、この建物は最初の全鉄筋

コンクリート造のオフィスビルとしてあまりにも名高い。倉庫については、同誌が「壁は煉瓦造にして屋根及柱は鉄筋コンクリート造りとし床は木製にして」と記しているように、煉瓦と鉄筋コンクリートに木造を加えた、いわゆる混構造である。当時はまだ新しい技術であった鉄筋コンクリートの性能を試験的に倉庫で使用することで確かめた上で、事務所ビルにおいて全面的に鉄筋コンクリートを展開したとされることを踏まえると、この倉庫は鉄筋コンクリート造建築のプロトタイプのひとつとして捉えることもできる。一方、見方を変えれば、この煉瓦・鉄筋コンクリート・木からなる、倉庫におけるユニークな混構造は、結果として一種の柔構造として機能し、それが故に関東大震災にも無傷で耐えたとも考えられる。なお、明治創建時の事務所ビルは柱梁構造であるが、昭和増築部ではフラットスラブが採用されており、これも日本のフラットスラブの最初期の試みと言える。

事務所ビルは、最初の全鉄筋コンクリート造という構造面からの重要性のみならず、意匠的にも注目される。すなわち、突出したコーニスとその持ち送りを除いて、当時、通常用いられていた様式建築の細部を備えておらず、驚くほどモダンでシンプルであり、日本の近代オフィスビルの先駆的な作品でもある。それはまた、セセッション（ゼツェッション）の最初期の現われとも見なされるが、アール・ヌーヴォーのパイオニアとしても知られる遠藤於菟の会心の意匠作品とも捉えられる。加うるにこの建物は、創建当初からエレベーターを備え、屋上には水洗便所に用いるコンクリート製の水槽が設けられており、設備面においても先駆的な作品であった。もちろん、この建物は日本大通りの旧居留地に進出した日本の商社の建物の先駆けをなす貿易の最前線基地であり、この倉庫に置かれた生糸の量が一時期の日本の国家経済を左右するほどだったと言われる通り、日本近代史における重要性はいうまでもない。

以上のように、当事務所ビル及び倉庫は、日本最初の全鉄筋コンクリート造の建物であり、最初期の鉄筋コンクリート造建物の現存最古の遺構である。世界的に見ても、最初期の全鉄筋コンクリート造として貴重な遺構の一つであろう。日本の鉄筋コンクリート造のパイオニア、遠藤於菟が、倉庫において煉瓦造、木造と組み合わせた混構造として鉄筋コンクリートによる建築を試み、事務所ビルにおける全鉄筋コンクリート造の全面的な導入を経て、昭和増築時においてフラットスラブの使用へと至ったという、日本の鉄筋コンクリート造成立の歴史的展開が包含されているという点において、現存するかけがえのない技術史的サンプルであり、両建物のもつ建築史的、近代史的価値は極めて高い。



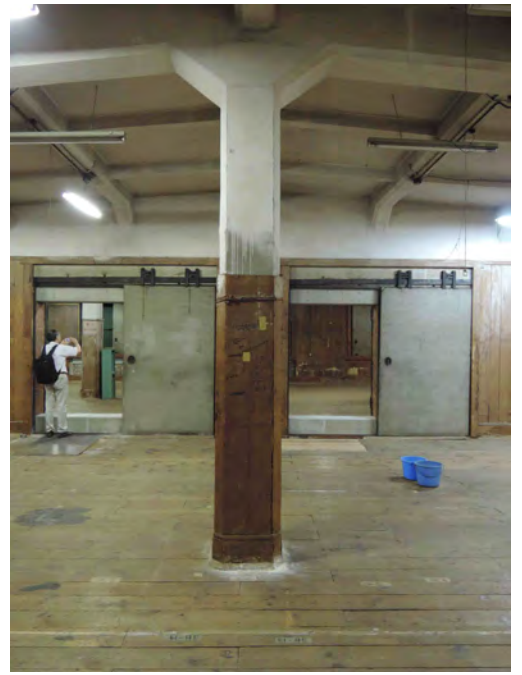
旧三井物産横浜ビル倉庫棟 海側側面



旧三井物産横浜ビル・倉庫棟 日本大通り側から



3階 全景



3階 RC柱と屋根スラブ



2階 間仕切壁における床組架構と吊り建具



2階 RC柱と柱頂部の床組構造



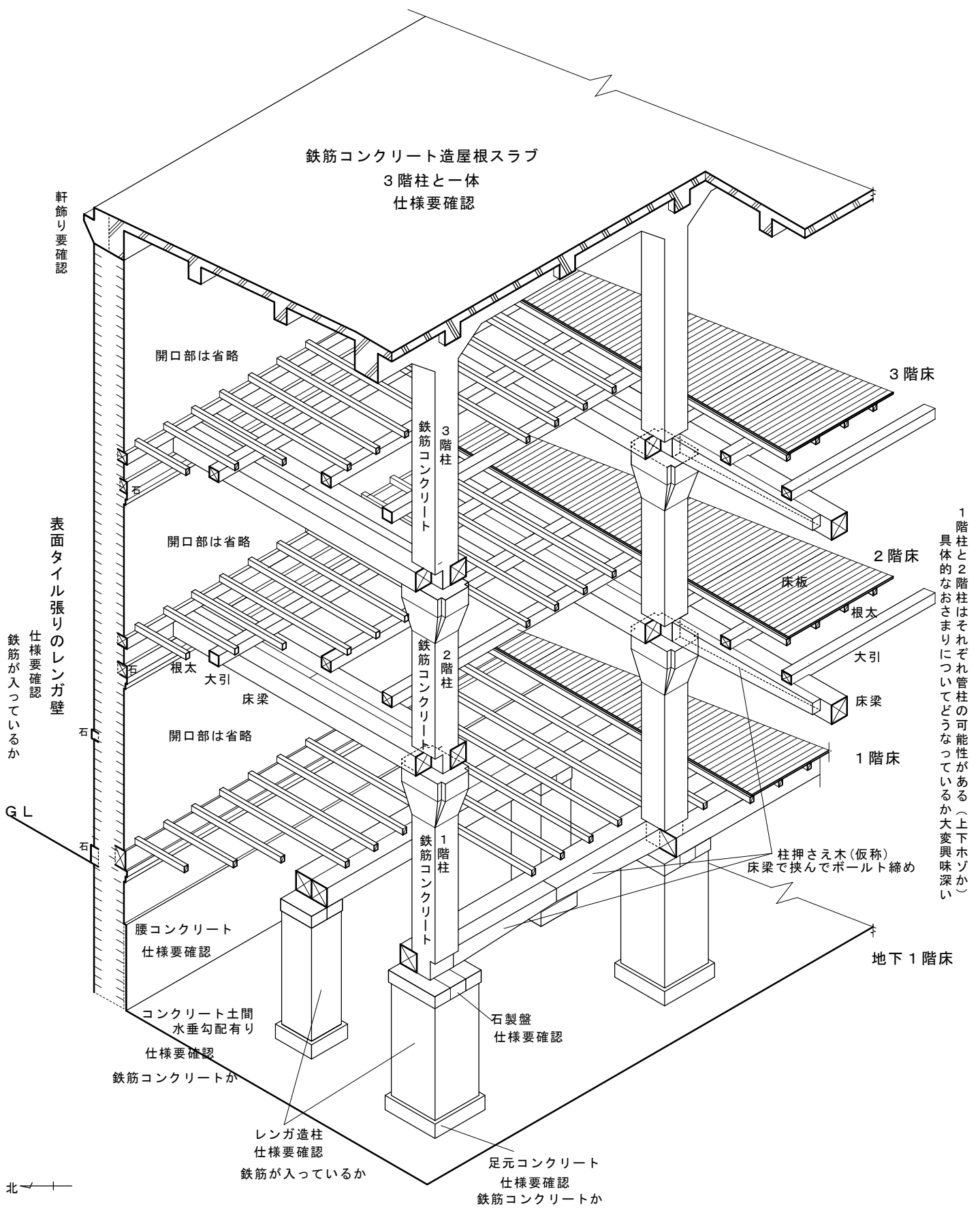
1階 全景



地下1階 柱と床組

撮影：大野敏（横浜国立大学）





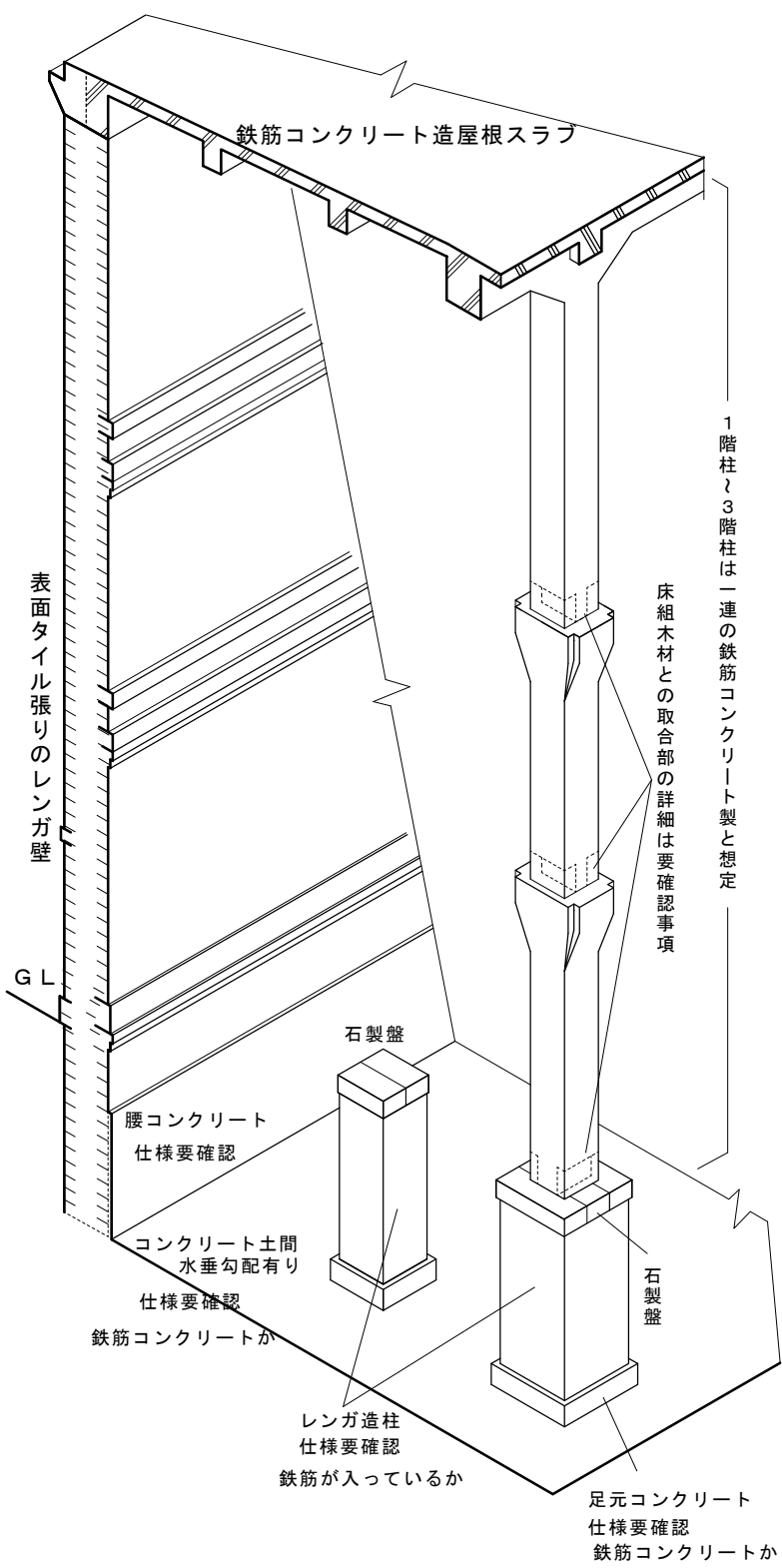
参考図 1 旧三井物産横浜支店倉庫 構造説明模式図

作図：大野敏(横浜国立大学) 140708 今後修正があり得る

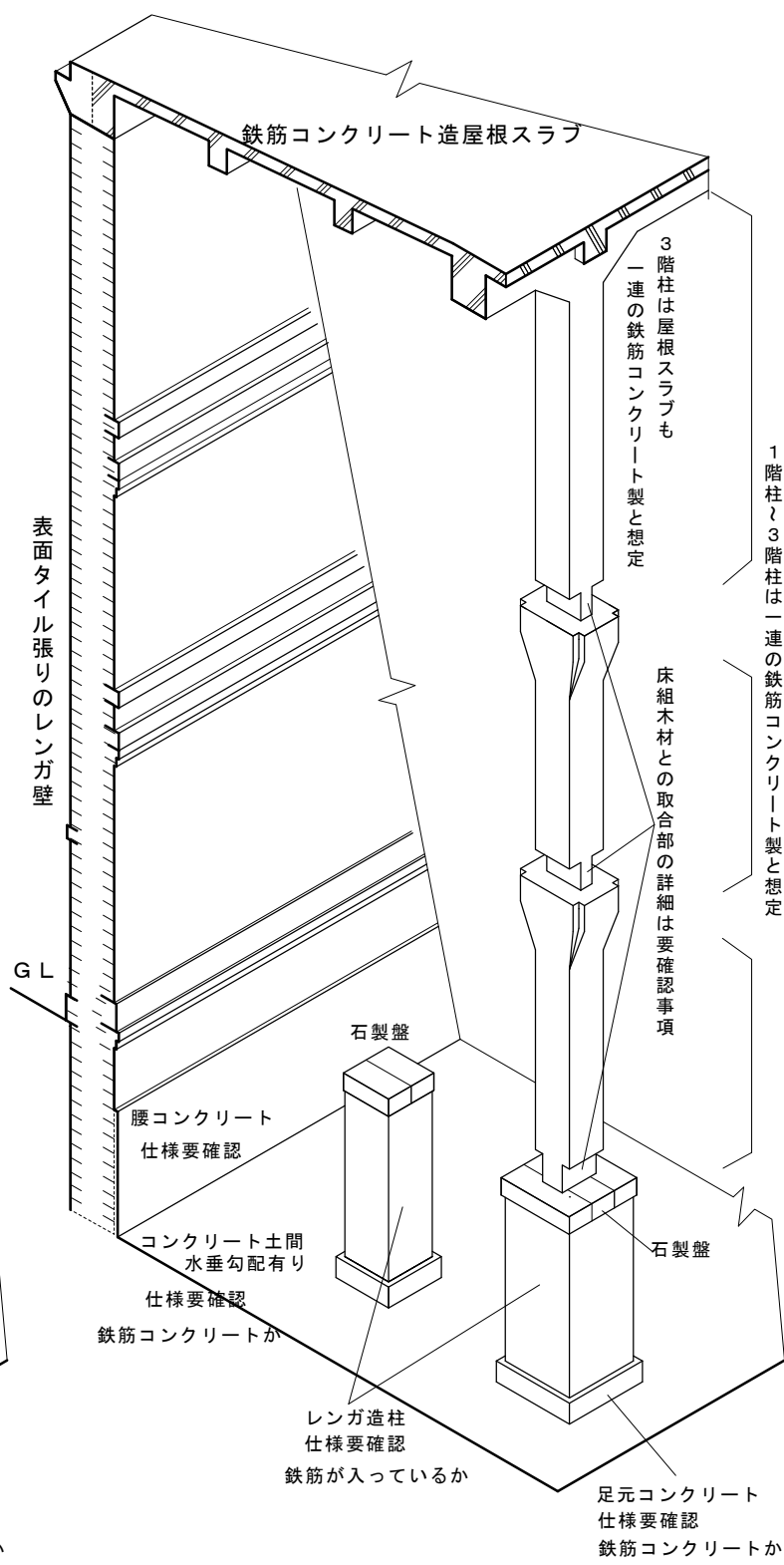
本建物はKN日本大通ビル(旧三井物産横浜支店)と共通する外観意匠を有する点と共にその構造手法において極めて特徴的である。すなわちレンガ造(壁体および地下1階柱)・木造(床組)・鉄筋コンクリート造(1階柱・2階柱・3階柱および屋根スラブ)を組み合わせた混構造を示し、明治末期にどのようにレンガ造・木造・鉄筋コンクリート構造を捉えていたのかを考える上で示唆に富む。特に技術史的視点から見て日本近代建築史上極めて重要な遺構といえる。

また、上図は構造模式図のため、軒飾りや外装タイル等の装飾部、扉や建具等の柱間装置などの図は省略しているが、これらの部位も詳細図作成を行い部材保存を図る必要がある。したがって上図に示した各部位については詳細な仕様調査を実施し、典型的な部位の保存に務める必要がある。

なお、鉄筋コンクリート柱は1階~3階まで一体成形の可能性と1階・2階・3階とも個別成形の可能性が考えられるが(参考図2、この図は後者の想定で描いた



柱を1階から3階まで一体成形していると考えた場合



柱を1階・2階・3階とも別個に成形していると考えた場合

参考図2 旧三井物産横浜支店倉庫 構造説明模式図(おもに鉄筋コンクリート部分に注目して)